矢沢地域情報誌
やまぼうし
No.44
2023年6月1日
発行／矢沢地域振興会（矢沢振興センター内 ☎・FAX29-5480） 印刷／トーバン印刷㈱
mail：yashinkai025@gmail.com

みんなの参加により こころ豊かな地域の実現を！

矢沢地域振興会（中島健次会長）は4月15日に矢沢振興センターで令和5年度定期総会を開催しました。

矢沢地域振興会では、幅広い地域住民の積極的な参画・協働による活発な地域づくり活動を行い、健康でこころ豊かな住みよい矢沢地域の実現を目指します。

議長の柳田清さん（高松第三行政区）

総会の一コマ（挨拶する中島健次会長）

地域づくり交付金事業（1160万円）は、各地区・団体等の要望を取り入れながら活発に実施します。

交付金事業として、①特定事業部会事業は、生涯学習、高齢者対策、子育て支援、伝統芸能振興、ニュースポーツ推進、災害対策、地域情報に332万円②重点事業は、ふるさと観光振興、スポーツ振興、環境保全活動に80万円③一般事業は、防犯対策、交通安全対策、生活道路整備、教育振興対策に340万円④その他矢沢地域ビジョンに示す事業に150万円を計上して取り組んでいきます。

これらの活動を行う上で、安全安心を担保する観点から、雑費（自主財源）として16万円を計上し、矢沢地域全世帯を対象に自治会活動保険に加入することとしました。

また、花巻市の指定管理委託により矢沢振興センター及び矢沢地区社会体育館の管理を行っています。（指定管理料は振興センター610万円、社会体育館43万円）

なお、自主財源として地域の皆様から会費一戸100円を頂いております。

今年度も各種事業の遂行に向け、皆様のご協力・ご支援をお願いいたします。

後世に残したい棚田の風景を

幸田地区中山間地第3集落
代表　内舘　勝人

幸田地区には、花巻市のふるさと100選に選定された幸田の棚田があります。

幸田の棚田は、いわゆる中山間地域と呼ばれる傾斜の急な法面のある田んぼが連なっている地域であります。

当集落は、国の中山間地域等交付金事業を活用し、平成12年度に設立し、現在、協定面積約29万㎡、集落協定者24名で、管の入替、砂利敷、公共用地の草刈作業を集落の共同作業で行い、耕作放棄地の防止、農用地等の適正な維持管理に努めてきました。

非農家を含めた地域住民の交流の機会を広げ、地域の発展を図るため、これまでの活動に加え、幸田地区自治会、幸田行政区等の関係団体の協力を得て新たな事業にも取り組んでおります。

令和2年度からは、999㎡の休耕田をお借りして、幸田ふれあい農園を開設しました。春に300本のサツマイモを植え、秋には収穫し、高齢者福祉施設を訪問し贈呈も行っております。

令和4年度からは、集落内にあるため池の環境整備が完了したことから、魚釣り大会を開催しております。団体の部と個人の部に分かれ、たくさん釣った人には大漁賞、大きい魚を釣った人には大物賞を贈りました。

幸田ふれあい農園の畔には景観作物としてキバナコスモスを植えました。鮮やかなオレンジ色の花が咲き誇り、道行く人の心を和ませることができたのではないでしょうか。

また、多くの種が採れるので採種会を開催し、皆さんに喜ばれました。

サツマイモの収穫

ゼニタナゴ生存環境（岩手県天然記念物）の保全活動③

矢沢地域の自然保護を考える会 会長 菊池 統一

季刊「やまぼうし第43号」に掲載の標記保全活動②は「ゼニタナゴの生態」についてのお話でした。今号が最後で、「ゼニタナゴの日常の保全管理」についてのお話をいたします。

日常の保全管理

当会の活動はゼニタナゴの養殖ではなく、ゼニタナゴが自生できる自然環境・山里の原風景の保護ですので活動は下記のように多岐にわたります。

①外来種の駆除・放流禁止：ゼニタナゴやシナイモツゴの在来種が生存出来る環境を保全・維持するため、タイリクバラタナゴやアメリカザリガニ等の駆除や、外来種・肉食魚・爬虫類の放流防止。

②子どもを対象に自然観察会を1回／年の開催

③水域の補修、周辺山林の間伐・下草刈り、ため池の草刈り等

④水路・水域のアオコ、水草等の除去

⑤密漁の防止：インターネット等で、ゼニタナゴの生息を確認して、神奈川県等からゼニタナゴを取りに来る愛好家がいましたので、今は、保護地域であることを看板で表示し、密漁の防止をしています。

私達は今、タイリクバラタナゴ、アメリカザリガニ、ミドリガメ等の外来種の駆除に苦労しています。

駆除の方法はカニ籠20個を管理水域に仕掛け、毎日、会員が籠に入った、アメリカザリガニ、タイリクバラタナゴを週にバケツ1杯位捕獲し、堆肥にしています。

カニ籠回収作業

水路では定期的な追込み漁でタイリクバラタナゴを捕獲・駆除しています。

タイリクバラタナゴ等の追込み漁

それでも、タイリクバラタナゴの繁殖は抑えられず、昨年度は2度、一部の池及び水路を干しました。

池・水路を干すためには事前に在来種移植しなければいけません。特に、タナゴ類が卵を産むドブガイは移植先が難しいのです。タイリクバラタナゴが卵を生んでいる可能性が高く、幼魚が貝外に泳出しても育たない環境に一時移植する必要があります。バケツ10杯程度を移植しました。

池干しは先ず、上流からの流入を遮断し、ポンプで排水します。途中で、生物を捕獲しながら池の水をすべて排出しましたが、しばらくすると泥から染み出した水が所々に水溜まりとなり、魚などが集まってきます。排水しながら、それらの生物を捕獲しました。

ポンプ排水後異物除去用の籠を揚げると、タイリクバラタナゴが穴に頭を差し込んでさながら差し込み漁の景観でした。捕獲した在来種（鮒類、よしのぼり、エビ類）は上流の池に放し、外来種（タイリクバラタナゴ、アメリカザリガニ）は駆除しました。残念なことにゼニタナゴは2匹しか確認できませんでした。

ポンプでの排水作業

外来種又は、移入種は魚類・甲殻類に限らず、植物（西洋タンポポ、浮草等）、哺乳類（ハクビシン等）爬虫類等がありますが、今、私達は浮草に困っています。2年前から赤い色の浮草が水面を覆うようになりました。

捕獲した魚類

渡り鳥に付着して来たのでしょうか？ アメリカザリガニ駆除のついでに網で掬い駆除しています。

浮草の駆除

私たちはゼニタナゴの保護活動を通して、天然記念物指定地域に生存するゼニタナゴ以外の希少生物や在来種の保護活動を行っています。地球温暖化の影響や外来種の浸入で故郷の原風景を維持することは難しくなっていますが、ゼニタナゴが群泳していた原風景に復帰出来る様に、支援・協賛団体及び地域の協力を得ながら活動を続けます。

小学校コーナー

4月7日、新1年生55名の入学式が行われました。今年度は、新型コロナウイルス感染予防はしつつも、児童と教職員はマスクを外し、来賓として学校運営協議会委員の皆様にご臨席頂く中で開催することができました。新一年生を迎え、矢沢小学校児童370名で令和5年度がスタートしました。

4月12日・17日には、交通安全教室が行われ、自転車のルールや道路を歩く時の約束などを学びました。指導していただいた矢沢駐在所職員様、交通指導員・交通安全母の会の皆様ありがとうございました。

また、日頃より、スクールガードの皆様、地域の皆様には、子どもたちの登下校を見守って下さり大変大変感謝しております。どうもありがとうございます。今後も子どもたちの安全のためにも、ご指導や挨拶等のお声掛けをよろしくお願いいたします。

コロナ感染症が5月8日から5類感染症に移行することを受け、これまでの様々な制限が解除されます。小学校でも、地域の感染状況を注視しながら、アフターコロナの学校生活をつくって参りますので、引続きご協力を宜しくお願い致します。

1年1組

1年2組

中学校コーナー

令和5年度 順調にスタート

入学式

【4月6日（木）】

男子26名、女子27名、計53名の新入生が入学しました。厳粛な雰囲気の中、新入生誓いの言葉を駒込妃花乃さんが、歓迎の言葉を生徒会長小松要平さんが堂々と述べました。今年は2、3年生、ご来賓出席の中で行われた久々の入学式となりました、53名一人一人を歓迎する温かい雰囲気の式となりました。

1年A組

1年B組

盛岡市内一周継走

【4月16日（日）】

春雨のなか、盛岡市内一周継走大会に、本校の精鋭が参加しました。結果は男子29位（97チーム出場中）、女子31位（86チーム出場中）と全員が好走し、目標としていた素晴らしいタイムを残しました。

力走する女子ランナー

応援幕

3年修学旅行

【4月19日～21日】

2年生の3学期から計画をしていた、東京・関東方面への修学旅行。班別研修では、自分たちで、研修場所や移動手段などを調べ、どの班も協力して『大都会』での研修を成功させることができました。

様々な経験を通して、日本の首都東京の機能を知ることができました。一方、岩手から離れる事で、「やっぱり矢沢がいいなぁ」と地元の良さを再認識することもできました。

修学旅行　浅草寺

私のひとこと

自主防災組織に思うこと

石崎 信彦

私は平成28年に消防職員を退職し、現在、東十二丁目自主防災組織の役員をしていますが、今、地域防災について思っている事を書かせていただきます。

近年、温暖化の影響と思われる大規模自然災害が全国各地で多発しています。

東日本大震災から12年が経過し災害の記憶、教訓が風化しつつある中で、千島海溝・日本海溝巨大地震の発生が懸念されています。

千島海溝・日本海溝巨大地震とは、南海トラフ巨大地震や首都直下巨大地震の陰に隠れていますが、その発生リスクが非常に高く、国も最高危険度ランクにしている北海道や東北地方北部（千島海溝）と三陸沖から房総沖（日本海溝）を震源とする巨大地震です。

この巨大地震で想定されている規模は、北海道沖の千島海溝でマグニチュード9.3、東北沖の日本海溝でマグニチュード9.1と非常に巨大で、この数値は、マグニチュード9.0の東日本大震災を超える規模であり、過去のデータでは、平均350年間隔で巨大地震が発生しているので、千島海溝沿での最後の巨大地震から約400年経っている現在では、いつ起こってもおかしくないと予測されています。

防災は「自助」「共助」「公助」が基本と言われてきました。

しかし、公助には限界があり、近年はいざという時にすぐに駆け付けてくれる家族、隣人、向こう三軒両隣など、近くにいる人が頼りになります。少子高齢化時代は、みんなで助け合う共助と共に、顔の見える近くにいる人が見守り、近くの人が助ける「近助」が重要であると言われています。

「近助」とは、向こう三軒両隣の「ご近所同士が積極的に助け合うこと」です。この「近助」こそが、災害から被害を最小限に留める自主防災組織の重要な部分であり、地域コミュニティーの活性化が必要不可欠であると考えています。

昔は田植え等の農繁期に隣近所で助け合う「結」の制度がありました。子どもの頃はご近所同士が農作業の合間の休憩（こびる）時間に、大人も子どもも楽しく会話している風景が思い浮かんできます。

しかしながら最近は高齢化、核家族化が進み、個人の価値観が多様化するなど、地域を支える人材が不足し、住民同士のつながりが希薄になってきているように思います。

最近「お節介」という言葉を聞かなくなりました。「お節介」の意味をインターネットで検索すると「迷惑になるような余計な世話を焼くこと。義侠心が強く、困っている人を黙って見過ごせない」等と表示されます。

昔は何処にでも、近所のことは何でも知っていて面倒見がよく、頼んでもいないのに人の世話を焼く、お節介爺さん・婆さんがいたように思います。

65歳を過ぎ、高齢者と分類されるようになりましたが、今後は地域の安全・安心を守る「近助」を構築するためにも、地域のちょっとした変化に気が付けるお節介爺さんになろうと思っています。

お節介が過ぎて皆様にご迷惑をお掛けするかもしれませんがよろしくお願いします。

わが同好会の紹介⑰

クローバの会

赤井 喜恵子

日常生活を健康で快適に過ごせるために、ストレッチ運動と親睦を目的に地域の友人たちと「クローバの会」を発足し今年で15年。

簡単なストレッチでも一人ではなかなか継続出来ないけれど、週に一度集まり、皆で行えばあっという間の一時間。

心身共に元気になれる時間です。

新たな主任児童委員に 深澤 俊道さん

欠員になっていました主任児童委員に歓喜寺住職の深澤俊道さんが就任されました。

今後のご活躍を期待しています。

【編集後記】

今年の桜前線はいつになく早く一気に満開に。いつもより美しく見えた春でしたが今では新緑が目に眩しい季節となっています。

新型コロナも様々な規制が緩和され、分類も2類感染症から5類感染症へと移行。長かった閉塞感から解放されたようで観光地は人、人、人とのニュース。

野球では菊池雄星、大谷翔平、佐々木朗希の3選手が活躍。毎日、目が離せません。3人そろって上々のスタートを切り今年一年どんな成績を残してくれるのか楽しみです。

一方、コロナはウイルス自体の病原性が弱まった訳ではなく、今後、第9波が間違いなく来ると予測されていますから油断はできませんし、また、高齢者を狙った詐欺事件や、高齢者の交通事故と言った暗いニュースも後を絶ちません。私も同じ世代。緊張感を持って気を付けていきたいと思います。

（編集委員 佐藤 信一）

編集委員

広報委員長 古川 洋一
副委員長 松田 好隆
広報委員 多田 英治
佐藤 信一
押切 和美
矢小副校長 冨手 冬樹
矢中副校長 平澤 晋
佐藤 寿子
浅沼美紀子

次号は9月1日発刊予定です。